

# TUFS 言語モジュールにおける会話モジュールと CEFR の関連づけの試み

根岸 雅史

(東京外国語大学大学院)

東京外国語大学 21 世紀 COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」において、評価班は、多言語学習教材である TUFS 言語モジュールの学習者のために、言語能力の共通指標を提供することを目標にさまざまな調査を行ってきた。

和田・長沼・田中 (2004) や和田 (2004) においては、Common European Framework of Reference for Languages (以下、CEFR) をはじめ、the Association of Language Testers in Europe (ALTE) Framework, American Council for the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) Proficiency Guidelines, the National Curriculum for England, Canadian Language Benchmarks などの言語能力記述の枠組みの特性について分析した。その結果から、Web Based Training (WBT) 教材である TUFS 言語モジュールは CEFR との親和性が高いとしている。

また、多言語学習環境である本学においても、このような枠組みの開発の必要性は、今後ますます高まるものと思われる。CEFR が本学のような多言語学習環境に適用が可能であるかについては、中島・永田 (2006) で調査がなされている。この結果からは、本学の前期専攻語の学習者のレベルは、CEFR の A1 から始まり、B1 あたりまで伸びていることが分かっている。この意味では、同様のレベルの学習者を想定している TUFS 言語モジュールのカバーしているレベルは、およそ CEFR の A1 から B1 までであると考えられる。

多言語環境における言語能力の共通の枠組みである CEFR は、多言語学習教材である TUFS 言語モジュール、とりわけ、機能シラバスに基づく会話モジュールのレベル分けの指標として利用できる可能性が高いと思われる。ただし、CEFR は多言語に共通の枠組みであるがゆえに、個別言語に固有な文法・語彙などの記述はなされておらず、代わりに、その言語を用いる際の行動目標が記述されている。この行動目標は、I can ... で始まる Can-do Statements で示されているが、その多くは言語機能との結びつきが強い。

TUFS 言語モジュールは、モジュール・シラバスであり、その特徴は、コミュニケーション上の必要に応じた学習ができるように、項目の選択のみで、順序づけがされていないということである。モジュール・シラバスでは、理論上は、学習者が自分のニーズに応じた機能選択を行うとされて、とりわけ、会話モジュールの多くは、機能ごとにまとめられているために、どこからでも始められることになっている。しかしながら、特定のニーズを持たない学習者には、その選択は意外と容易ではない。したがって、言語習得上自然な習

得順序をある種のモデルとして示すことは多くの学習者に資することになるものと思われる。そこで、評価班では、TUFSS 言語モジュールの学習段階に応じたレベル分けの可能性を模索した。

以下では、TUFSS 言語モジュールにおける日本語・韓国語・中国語・フランス語・英語の会話モジュールの CEFR への関連付けを試みている。CEFR をもとに言語機能に基づく教材のレベル分けを行うことは、全体としては、不可能ではないといえるだろう。ただし、その言語機能を実現する言語構造やその他の言語的要因が、レベルを上下させることがあることが、以下の試みの中で分かった。言語構造や語彙などの記述のない CEFR を言語学習や言語教育に利用するに当たっては、当該言語の言語的側面との関連付けを行う必要が、世界でも認識されてきている。今回の試みにおいては、まだまだ主観的な判断に頼らざるを得なかった部分も少なくなく、今後その検証方法などの改善が図られることを期待している。

中島・永田. (2006). 「CEFR の日本人外国語学習者への適用可能性」(印刷中). 『外国語教育研究』 No.8, pp.5-23.

和田朋子. (2004). 「TUFSS 言語能力記述モデル開発のための試み：Common European Framework (of Reference for Languages) の考察」. 『言語情報学研究報告書』 No.5, 東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム, pp.89-102

和田朋子・長沼君主・田中敦英. (2004). 「言語能力の発達段階の記述について」. 『言語情報学研究報告書』 No.2, 東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム, pp.95-110